

保育者養成校における歌唱教材の内容とその指導方法

－幼稚園教育実習からみた音楽系授業の必要性－

The preferable musical tunes and teaching methods at the
training school of nursery and kindergarten

“More intensive music classes are necessary for the students’
practice teaching at kindergartens”

原 友美・西出 悦子

愛知みずほ短期大学

Tomomi HARA and Etsuko NISHIDE

Aichi Mizuho Junior College

Abstract

Purpose of the study: Since our college students are unskilled in playing the piano, more intensive musical classes are needed. The role of the piano teaching faculties are discussed.

Methods: After practice teaching at kindergartens, we questionaired the students on items such as, (1) what were their required musical tunes,(2) how to introduce to the musical tunes, (3) what were their self-evaluations on their performances, (4) what were their next targets.

Results: Almost all students were requested to play the piano at kindergartens. But their skills proved to be lower level than those required at the kindergartens.

Proposal: It is necessary to reinforce the piano teaching system through cooperations of “piano” and “expression” classes during two-years in the college. In addition, pre-college teaching of the piano should be considered.

キーワード：幼稚園教育実習；音楽表現；ピアノ教育；異年齢集団；入学前教育

Keyword : practice teaching at kindergartens; musical expression; piano teaching; group of mixed-age;
Pre-college teaching

はじめに

1. 動機

前回の紀要 13 号で筆者原は「幼児期の歌唱教材」として「保育所での実践観察から見えてきた歌唱教材の条件」について考察した。その結論として「子どもたちが歌うことによって『主人公』になれること」等 3 条件¹⁾を述べたが、紙数に制限もあり、幼稚園・保育所の歌唱教材として大切な「生活の歌」「季節の歌」については言及していない。同号で、作曲家丸山亜季の歌曲について考察したが、丸山は、「もみじ」「チューリップ」は一般的な風景であったり、きれいな花の歌であっても、しばしば説明的で「大人の世界」からみた歌であり、「子どもって主人公になれない」²⁾と述べている。しかし、筆者らは次のような別の見方をする。

「生活の歌」「季節の歌」では、歌唱教材の導入部分、すなわち「子どもの中へ入るセンス」が最も大切である。子どもたち一人ひとりが生活経験に基づく歌詞の解釈や曲のイメージを出し合っただけで感動を共有しながら歌に入っていくことが表現を深めていく基になると考える。

2. 目的

保育現場での「生活の歌」「季節の歌」の導入方法や歌唱教材の指導方法を知るために、幼稚園教育実習を行う学生を対象としてアンケート調査を行った。また、子どもが歌唱教材を表現豊かにうたうための手段としてピアノ伴奏が用いられている。しかし、保育者養成校である本学に入学してきたものの、ピアノに苦手意識を持っている学生が多い。学生は入学して 1 年もたないうちに保育実習がある。また、幼稚園教育実習では音楽(ピアノ等)に触れる機会が必ずある。

本学では「開講科目」としての「音楽(ピアノ)」の授業は「選択科目」であり、その授業を補うため、「必修科目」の「音楽表現」の授業でも実習に向けて弾きうたいの表現としてピアノの試験を行っている。

そして、卒業するまでの 2 年間で、保育現場で生かせるようなピアノの技術を習得し、保育所、幼稚園等に就職していくことが望まれる。ピアノに接する時間が少ない中、効率よくピアノをマスターしていくため、幼稚園教育実習 2 回目を終えた学生にアンケートを行い、実習で与えられた曲の傾向を知り、授業の計画に生かしていく。入学時から実習に向けた曲を練習し、就職に繋げていくことが音楽系授業の役割ではないか。

先行研究としては保育実習に関するアンケート調査結果の分析³⁾があるが、筆者らが行った実習事前訪問から実習後までの一連の調査項目にはふれられていない。また、音楽系授業の必要性や教員の役割には決して言及されていない。

そこで、学生へのアンケート調査をもとに、音楽系授業の役割と連携の必要性と、本学の「入学前教育」から授業にいたるまでのピアノ教育における教員の役割について考えることを本研究の目的とした。

I. 研究方法

本学の「子どもと音楽」の授業を選択し、幼稚園教育実習を行った学生にアンケート、並びに聞き取り調査を行った。実習の対象者の属性、及び実習期間は以下のとおりである。

学番	実習園名
名前	子どもと音楽
練習曲(課題曲)	
月 日からの実習の学生…10月10日13:00まで (授業の前まで)	

図1 実習事前アンケート用紙

対象：本学子ども生活学科子ども生活専攻

2年生 21名

実習期間：2018年10月15日～2018年11月16日

実習先：東海3県内 18か園

- ・公立幼稚園 4か園
- ・私立幼稚園 14か園

調査日時：2018年10月10日～2019年1月28日

調査方法：質問紙調査(記名式)

個別聞き取り調査

倫理的配慮：アンケート用紙にはプライバシー保護について万全の注意を払うことを記載し、また、調査結果は研究と授業改善の目的であることを口頭で説明をした。承諾が得られた学生からアンケート用紙を回収した。

幼稚園教員免許取得を望む学生は 21 名であったが、実習事前(図 1)、事後(図 2)に回答した学生は 20 名であった。また、同一の幼稚園で実習を行った学生がいるため、実習園は 18 か園である。

II. 調査結果

幼稚園教育実習アンケート(図 1、図 2)から次のような項目について結果が得られた。

1. 事前訪問時に聞いてきた課題曲の傾向(季節、生活、宗教、その他)(図 1)
2. 課題曲をうたう

3. 課題曲の導入方法(以下 図2)
4. うたっている子どもたちの様子
5. 実習時の自分自身のピアノの演奏に関する評価と今後の目標
これら5項目の結果を詳しく述べる。

学番 名前	実習園	クラス 男の子 女の子	歳 人 人
(1) 課題曲 <input type="text"/> (2) 年齢 <input type="text"/> (3) 導入を行った・何もしなかった 年齢 → <input type="text"/> (行った…具体的に話した言葉など) (何もしなかった…理由)			
(4) 実習中、歌っていた期間 <input type="text"/> (日数)		↓ (6) この曲を基に！ ① 何もしなかった ② 曲にちなんだものをみつけ、子どもと話した ③ 曲にちなんだものを見つけたときに、 子ども が歌いだした ④ 曲にちなんだものを見つけたときに、 あなた から歌いだしてみた。 ⑤ その他 <input type="text"/>	
(5) あなたのこの曲の練習期間 <input type="text"/> (日数や総時間)			
(7) この歌は子どもの年齢にあっていたか？ あっていた・あっていなかった どうして そう感じたのか <input type="text"/> その時の 子どもの様子は <input type="text"/>			
(8) あなたはあなた自身のピアノのレベルを評価してください。 できない0 <input type="text"/> <input type="text"/> 10 上手			
(9) 今後、ピアノの練習についてどうしていきますか。 <input type="text"/>			

図2 実習事後アンケート用紙

1. 事前訪問時に聞いてきた課題曲の傾向

1) アンケートによる課題曲の傾向

学生には、事前訪問時に園から与えられた練習すべき課題曲を図1の実習事前アンケート用紙に書いてもらった。そうすることによって学生が知らない曲でも、教員が先にマスターし、指導できる。その課題曲の分類として「季節の歌」、「生活の歌(朝、昼食、帰り)」、「その他」に分けた。課題曲の傾向は、先行研究⁴⁾からも一定の曲であることがわかっており、1年時から「音楽(ピアノ)」の授業で練習を行っている。そして、今回のアンケートからもほぼ同じデータが得られた。

2) 学生の実習事前訪問と課題曲

学生は実習が始まる約1か月前に実習事前訪問に行き、実習中の毎日の流れや持ち物についてご指導いただく。歌についても訪問時に課題曲を聞いてくるように指導をしている。学生が訪問するときに配属クラス

が決まっています、課題曲も示されることがほとんどだが、中には配属クラスが決まっていないこともある。また、配属クラスが決まっても、課題曲が提示されない園もある。その場合は、配属クラスすなわち、年齢に応じた曲の選択をしなければならない。曲を決めるときの注意事項として、教員からは「対象年齢」、「季節」を考えて選択することを伝えている。しかし、学生には「対象年齢」と曲が結びつかない現状がある。発達年齢は別の科目で勉強しているが、発達と音楽、曲が結びつくように授業内容を構成しなければならない。

また、園独自の曲がある場合は、幼稚園からの提示があり、学生は課題曲を「練習をしなければならない」という意識が強い。その意識は、授業に楽譜を持ってきて練習をしたり、教員に弾いてもらったりしていることからうかがえる。

表1 課題曲について 実習後のアンケートより

季節の歌(表3参照)		17人	85%
生活の歌	朝の集まり (15人 75%)	・朝のうた	10人 50%
		・おはよう	3人 15%
		・おむねをはりましょう	2人 10%
		・園独自の歌	4人 20%
	昼食時 (15人 75%)	・おべんとう	15人 75%
		・おひるがきました	2人 10%
	帰りの集まり (16人 80%)	・おかえりのうた	11人 80%
		・さようならのうた	4人 20%
		・園独自の歌	4人 20%
その他(表3の*参照)		10人	47.6%

(公立園4か園、私立園16か園)

何も提示されない実習先には、詳しくはIIの2の3)で述べるが、表1の「生活の歌」から「朝のうた」「おべんとう」「おかえりのうた」は必ず弾けるようにしている。この3曲は弾けることが前提条件であり、あえて訪問時には提示されないこともある。

本論文で取り上げる曲については、末頁に作詞・作曲者を記述した。

考察

Ⅱの1から考察すると、「朝のうた」「おべんとう」「おかえりのうた」の3曲は、事前に実習先から最も多く与えられる課題曲であり、先行研究とほぼ同じデータであることが明らかになった。この3曲は実習に限らず練習することを学生に伝えてきたが、このたびのアンケートの集計から得た「課題曲の傾向」は、納得のゆくものである。しかし、学生は「生活の歌」を練習し、弾けるようになって実習に参加するものの、園独自の歌に戸惑い、ピアノに対する苦手意識はぬぐえない。また、「季節の歌」は事前訪問時で示されることがあり、この場合は音楽の教員と季節や幼児の年齢等を考慮して歌を選択し、1か月ほどの短期間で練習しなければならず、学生の負担は大きいと考えられる。

2. 課題曲をうたう

課題曲は、大きく分類すると「季節の歌」と「生活の歌」「その他」である。分類については以下のとおりである。

表2 課題曲の分類

分類	曲の内容と説明
「季節の歌」	その時期を考慮して保育者が子どもたちの発達や年齢にあった歌を選択する。また、キンダーブック等の副教材として使用する絵本に載っている歌をうたう。
「生活の歌」	入園から卒園まで日課としている歌であり、決められた曲を使用している。これは既存の歌のほか、園独自で作られた歌や宗教を重んじた歌が取り入れられていることもある。
「その他」	季節を問わない歌

これらをうたう時間帯は、「生活の歌」については、「朝の会」や昼食とき、帰りの会等である。「季節の歌」や季節を問わない歌をうたう時間帯を聞くと、「朝の会」にうたうと答えた学生が9人いた。ほかに「朝の会」以外に決まった時間にうたうと答えた学生が3人、決まってはいるが朝の出席状況を確認している時間、昼食前や帰る前の時間であった。このことから、歌に親しむ時間の多くは「朝の会」であることがわかる。

1) 「朝の会」

多くの実習園では、歌をうたう時間帯を「朝の会」で行っていることが聞き取りから分かった。「朝の会」は、歴史的にみると、戦前に開設された園、あるいは

昭和20年代前半に設立された園でも、当時すでに「集会」「礼拝」「朝礼」「モーニングトーク」「本堂でお集まり」等、題目は園により異なるが開かれていた⁵⁾。その内容は、全園児を一斉に集めて歌やお話をするという「一日の保育の始まり」を表すものであった。

最近の「朝の会」の意義に関する研究発表⁶⁾をみると、登園後から始まる子どもたちの自由遊びの時間をしっかりと確保するために、「朝の会」は行わないという園もある。

しかし、「見通しが持ちにくい」「気持ちの切り替えが難しい」「コミュニケーション能力に課題を持つ」等、配慮の必要な子どもがいる園では、「出席を確認し、クラスに今日どんな子がいるかを知らせる」「その日の予定を時間軸に沿って話す」等、共に育ち合うために「朝の会」は、重要だと考えている。

前述したように実習園では「朝の会」でうたうことを重視した園が多い。「朝の会」については「朝の会」とは言わず、「朝活」や「朝礼」と呼ばれる朝の集まりを行っていた(以後、朝の集まり全般を「朝の会」とする)。

「朝の会」では、「朝のうた」、朝の挨拶等を行ってから「季節の歌」をうたっていた。学生の感想から、歌詞を覚えてうたうことは大切であるが、子どもと一緒に歌詞に合わせた振り付けを考えることで歌のイメージを広げ楽しんだり、身体を動かしてうたうことは脳の発達にもつながったりすると学んでいる。また、発声練習を行ってからうたったと学生から聞き取った。発声については、Ⅱの3の2)で述べる。

「朝の会」を行わなかったと答えた学生から歌について聞き取りをまとめると、うたわれている歌は子どものリクエストで決めていたり、毎月の保育計画にうたう歌が計画されていたりしていた。また、特定の時間にうたわなかったと答えた学生からは、給食の前や降園の前等活動の切り替えにうたっていることがわかった。これは子どもの活動をしっかりと確保していることがわかる。

2) 「生活の歌」

表1からもわかるとおり、「生活の歌」では、曲が限定されていることがわかる。

「朝の会」では「朝のうた」「おはよう」がうたわれている。朝にうたう歌を調べると種類はたくさんあるが、この2曲が主流である。

また、昼食は、弁当持参、自園調理、給食業者依頼等であるが、うたわれる曲は「おべんとう」の歌が多い。昼食形態がさまざま、歌詞の「おべんとう」を

「きゅうしょく」に変えている園もある。ほかに、「おひるがきました」があるが、「おべんとう」は短大1年前期にマスターしておきたい課題曲と考えられる。

帰宅する前も「朝の会」と同様、「帰りの会」等の集まりをしている園があり、「おかえりのうた」または「さようならのうた」がうたわれている。この2曲も帰りにうたわれる代表的な曲である。

3) 「季節の歌」「一年中うたえる歌」「行事のための歌」

表1を見ると「生活の歌」と同様、「季節の歌」もよくうたわれている。10月～11月にかけて行事のある園が12か園あり、運動会や遠足、生活発表会に合わせて「季節の歌」をうたっていた。実習が秋なので、「まつぼっくり」、「どんぐりころころ」や「やきいもグーチーパー」等がうたわれている。

「季節の歌」は、どの年齢にも広くうたわれており、50年以上うたい継がれている歌が多い⁷⁾。これら季節に合わせた歌を選曲することは実体験ができ、歌への導入がしやすく、子どもはイメージしやすい。また、「幼稚園教育要領」の「自然に触れて感動する体験を通して」⁸⁾とつながるものである。

「季節の歌」以外にうたわれている曲として、「一年中うたえる歌」がある。「手のひらを太陽に」「きしゃぽぽ」「がんばりまんのうた」「にんげんっていいな」である。しかし、「汽車ポッポ」のように「汽車」を見かけない近年、知らない歌となっているがうたい継がれている。新幹線や私鉄電車、地下鉄等の玩具や絵本は人気で、これらを総称して「汽車」としてイメージを持ちやすいと考えられる。

表3 課題曲 (うたわれた園の数)

あき(2)	ふしぎなポケット(1)
山の音楽家(3)	ピクニックマーチ(1)
とんぼのめがね(3)	こんこんくしゃん(2)
うんどうかい(1)	やきいもグーチーパー(4)
運動会のうた(1)	大きな栗の木の下で(3)
えんそくのうた(1)	にんげんっていいな(2)
まつぼっくり(6)	どんぐりころころ(5)
バスごっこ(1)	もりのくまさん(1)*
汽車ポッポ(1)*	手のひらを太陽に(1)*
こぎつね(2)	がんばりまんのうた(1)*
たきび(1)	畑のポルカ(1)*
まっかなあき(1)	てをたたきましょう(1)*
くじらの時計(1)*	こもりうた(2)歌無し*

今年度の実習では、「季節の歌」は古くからうたい継がれている曲であった。

また、「行事のための歌」もうたわれている。運動会でうたわれる「うんどうかい」や、遠足前に「バスごっこ」、「くじらの時計」や「希望の歌」等を生活発表会にうたう園もあり、練習がなされている。

4) 「宗教を重んじた歌」

宗教を重んじた歌をうたっている園も3割近くあった。

東海3県の実習園は私立園が多い。「明るく思いやりのある子」や「感謝する心」「いたわる心」が育つよう「ののさまに」や「恩徳讃」などを園歌としている園もあった。しかし、宗教を重んじた歌は、日頃なじみがなく、事前訪問時に楽譜をもらい、実習までの約1か月で①うたえる、②伴奏を付けて弾く、③最後まで止まらず弾くことを考えると、事前準備の負担は大きいと考えられる。実習前に学生は「知らない曲だから、弾いてみても(正誤が)わからない」と、教員に弾いてもらって練習を重ねて実習に臨む姿があった。

考察

IIの2の課題曲をうたうことを考察する。課題曲の分類は、先行研究と同様で、表1・2のように「季節の歌」「生活の歌」「その他」に分けられる。そして、これらをうたう時間帯が「朝の会」であったり帰りの集まりであったり、時間が決まっていなかったりさまざまであることが実習生の聞き取りから理解された。「朝の会」にうたうことが多いが、生活の流れや子どもの自発性を重視し、歌の時間を設定する必要はないと考えられる。それは、「幼稚園教育要領」総則にあげられている「幼児の主体的な活動を促し、「自然の流れの中で生活に変化や潤いを与え、幼児が主体的に楽しく活動できるように」⁸⁾することから、生活の中で、うたいたくなる環境が生まれたときや生活に変化をもたらすときにうたっているのではないだろうか。

「季節の歌」と同様に「一年中うたわれる歌」、「行事のための歌」についても、今年度の実習では、古くからうたい継がれている曲が多いと考えられる。このことから、授業の早いうちから実習時期を考え、古くからうたい継がれている「季節の歌」や「一年中うたわれる歌」を学生に提示することができると考える。これは「音楽(ピアノ)」の授業で実習時期を考えた課題曲「季節の歌」を取り上げてきたことが実証され、確認できた。

しかし、「宗教を重んじた歌」をうたうことは実習園が決定しない限り、練習は難しい。実習園独自の歌を

うたう場合は必ず事前に課題曲として出される。その学生は短期間で弾けるようにするためには、正確な曲を教員に弾いてもらい曲想を覚えることが早く成果につながる。そのために学生は音楽系授業を選択し、練習時間を持つことが必要であると考える。

3. 課題曲の導入方法

「はじめに」で述べたように、歌唱教材の指導方法として導入はとても重要である。実習後のアンケート結果表より、「季節の歌」と「生活の歌」、「その他」では導入が異なるようである。

1) イメージの導入

「季節の歌」では、曲のイメージを引き出す言葉がけが多く、保育内容5領域の「表現」や「言葉」に関する導入が多くみられる。「まっかな秋」では、「蔦の葉」や「からすうり」などの写真や実物等の視覚的な教材を用いている。「蔦の葉」や「からすうり」など園周辺にそれらの自然環境が少なくなっている現代においては、ITの発達によってインターネットから調べ、写真を見せることができる。たとえば、10月の絵本には「まつぼっくり」の絵と歌が載っており、導入として絵本を活用している園もある。「まつぼっくり」という言葉は知っているが、地域によっては実物を見る機会がない。視覚的な教材を導入することによって「まつぼっくり」の実物がわかる。

また、歌がうたえるようになると、「山の音楽家」では、音楽隊員のポーズを取り入れたり、「こぎつね」では身振りをつけたり、歌詞の中に出てくる知っているものを自分の身体で表現する楽しさを取り入れたと考えられ、身体表現を導入に行っている。

「行事の歌」として歌唱教材「うんどうかい」「バスごっこ」等がうたわれている。秋の遠足を前に「もうすぐえんそくだね、おおきいバスにのっていきよ」や、運動会前には、「玉入れではいっぱい玉をいれようね」等、目的に向かっての意欲が持てるように導入している。

一方「生活の歌」や「園歌」では導入していない。筆者西出も幼稚園教諭の経験から、入園当初には導入をしていたが、日常的になると、毎回の導入はしていなかった。「生活の歌」や「園歌」は、すでに生活の一部になっていて、うたっている子ども一人ひとりが「ののさま(ほとけさま)に今日もけがをしないように」、帰りには「一日楽しかった」の気持ちを持ってうたっているのではないだろうか。これは、実習生には日課の一部としか見えていない。

2) 発声法の導入

前述したイメージからの導入と並行して、うたう前に正しい発声法を行っている園がある。「怪獣の声はやめて」、「元気よく」等、保育者が子どもの現状を考えて言葉をかけている。また、「犬のおなかの発声」や「あいうべ体操」を行っている園もある。発声法を正しく行うことは深い呼吸であり、姿勢を正すことはお腹から声を出すことにつながる。

実習後の聞き取りから「導入がない」と回答した学生が多くいたが、個別に聞き取りをすると、歌に対して「言葉がけ」があったと答え、それが導入であることが学生に理解された。

歌をうたうときの導入については、1年生の「音楽表現」の授業で、毎回2人ずつ2グループが先生役となって手遊びを披露した。2回目は導入も考えて行い、言葉の導入だけでなく小物を製作し、視覚からわかりやすい導入方法を考えた学生もいた。また、人前で披露することに慣れることも目的として行ってきた。その結果、1年生の2月の実習では手遊び「キャベツの中から」に野菜のペープサートを作った学生もいた。そして子どもの前に立ち緊張したが、その緊張感を冷静に受け止めることができたと報告してくれた。

考察

IIの3の課題曲の導入方法の結果から考察すると、歌について子どもたちが視覚、聴覚等の五感を働かすように導入することは、子どもたちのイメージ作りや歌詞の内容を確認しながら友だちや先生と共感し合うことにつながっていくと考えられる。今年度行った手遊びの数人ずつの発表は次年度の授業でも小物を用いて行っていきたいと考える。これは、自信のない学生には適切なアドバイスができる。また、人前で行う緊張感に慣れると考えるからである。

しかし、「生活の歌」で行われている導入について、実習生は導入の必要性に気がつかず、軽視しているのではないだろうか。10月～12月にかけて幼稚園では行事が多い。その行事の一つに生活発表会として歌や劇を披露することがある。生活発表会は普段の生活を披露するためであるが、私立幼稚園では直前になると、発表会を期待する保護者のため、完成させようとする保育者の意識が働き、日課が省かれていたことが考えられる。「生活の歌」に関しては、「音楽(ピアノ)」の授業で早くから取り組むが、ピアノが弾けるだけで「生活の歌」をうたう意図に結びつかない。どうして導入が必要なのか、なぜ省かれているのかを「音

楽(ピアノ)」と「音楽表現」の授業で連動させて考えていかなければならない。

また、うたうときの姿勢や声の出し方についても子どもに伝えていく方法を学生は学ばなければならないと考える。学生は授業でも発声法は学ぶが、なぜそれが必要か、授業で伝える必要がある。

4. うたっている子どもたちの様子

幼稚園では子どもにあった曲を選んだり、子どものリクエストをうたったりしている。学生は、子どもの様子を「楽しそう」「歌詞が簡単でうたいやすそう」と感じている。また、「楽しそう」の中には、「ふりをつけて」「手あそびをして」とあった。このことから担任によって、子どもに歌のイメージを持ちやすいように工夫されていることが分かる。また、どんぐりやまつぼっくり等、実物を拾ったり、持ってきたりしていた。

1) うたう時間以外の歌への環境づくり

また、図2の(7)から、歌に関連したものを見つけたときに歌をうたったり、子どもがうたいたしたりしたと半数の学生が答えた。この結果は、責任実習時に歌をうたうことを意識していたと考えられ、うたう直前の導入ではないが、導入の一つと考えることができる。

2) うたいたくなる環境の一つ、異年齢のかかわり

今回の実習では、異年齢で歌をうたう時間を設けている幼稚園が2か園あった。

3歳児から5歳児の異年齢クラスで「朝の会」が行われている。担任は3人が交代でリーダーとなって活動を進めるため、そのリーダーの担当年齢に合わせた歌がうたわれることが多い。異年齢のかかわりは、5歳児がうたう歌を3歳児は模倣し、サビの部分は自分たちの歌のようにうたう姿がある。また、年少児がうたうと年中・年長児は以前うたった覚えがあるのでうたうことができる。異年齢クラスでは、歌が伝承されるため、覚えやすい環境である。

他にもバスコースごとで室内遊びを行っている園がある。全学年統一した曲を月単位で保育計画に組み込まれていて、例えば「たきび」の歌詞に「かきね」「こがらし」等、3歳児には難しいと思われる言葉が出てくるが、5歳児がうたっていると4歳児、3歳児は聞いて覚える。年長児が心地よくうたうことは、年中・年少児にはクラスでうたうことより、自ら聞いて自ら覚えることができ、異年齢で過ごすメリットである。

考察

IIの4のうたっている子どもたちの様子についての聞き取りから考察すると、子どもがうたいたくなるときとはどんな時なのか、どの時間でもどの場所でも自然とうたいたくなるのが子どもの姿ではないだろうか。その気持ちを汲み取って一緒にうたってあげたり、うたいたくなるような環境を作ったりすることが保育者の仕事である。

また、異年齢集団で過ごす目的は優しい心を育み、見よう見まねで意欲的に学び合えることである。歌も年長児のようにうたいたいと憧れ、意欲的にうたうことにつながる。同年齢ではライバル心が出るが、異年齢は頼り頼られる関係性において「表現」はともに学びあえる環境と言えよう。そして、音楽には年齢を超えた人間関係が生まれる。

5. 実習時の自分自身のピアノの演奏に関する評価と今後の目標

保育実習2回、幼稚園教育実習2回を終えて各学生の自分のピアノレベルを振り返ってもらった。0(できない)から10(上手)までの線上に印をしてもらった。

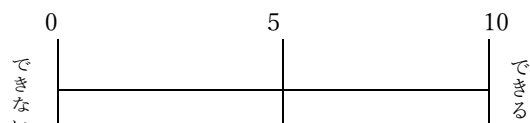


図3 ピアノレベルの自己評価シート

自分の現在のピアノレベルを振り返ってもらくと、教員が把握しているピアノレベルと学生自身が振り返ったレベルが一緒ではないことがわかった。教員が評価するレベル初級者でも8を付けた学生がいた。反対に1~2をつけた学生がみな初級者ではなかった。

表4 自己評価の結果

評価		人数
できる ↑ ↓ できない	9・10	0人
	8	3人
	7	3人
	6	2人
	5	6人
	3・4	4人
	1・2	2人
	0	0人

また、学生の今後のピアノの練習について、目標を尋ねると自己評価を6以上とした8人の学生は、

- ・ 弾ける曲を増やす(3人)
- ・ 練習を続ける(3人)
- ・ 弾きうたいの声を大きく(2人)

であった。また、5をつけた6人の学生は、

- ・ 止まらないようにする(3人)
- ・ 事前に季節の歌を練習しておく(2人)
- ・ 練習すると自信につながるので練習していく(1人)

しかし、自己評価を5未満に印をつけた学生が6人いた。その6人の目標は、

- ・ がんばる・努力する・上達したい(3人)
- ・ 季節の歌を練習する(2人)
- ・ 完璧だと思って何回も練習する(1人)

と回答があった。詳しくみると、この学生について教員からみるとピアノ初級者は3人だが、残りの3人は中級者であった。

考察

実習時のピアノの自己評価を行った結果、上級者が高評価とは限らない。これらは実習で緊張して弾けなかったことが原因とみられ、自信が持てていないと考えられる。ピアノができる学生にはより自信を持って、また中級者には自己評価8を付けた学生のように高評価するくらい楽しんでもらいたい。

また、今後各学生がどのように目標を持っているかをみてみると、自己評価が高い学生は、具体的な目標を立てている。一方、自己評価の低かった学生はどのように練習するのか、努力するのかがわからず、目標が漠然としている。初級者や自信のない学生には、教員が学生にあった目標を示すことが必要であると考えられる。

III. 総合考察

以上の幼稚園教育実習後の聞きとりをもとに「導入」を中心とした考察から始めていく。「はじめに」で述べたように、これまでのピアノ技術については先行研究からも実習の課題曲について分析され、本研究でも課題曲については同様の結果が得られた。しかし、歌をうたうときの「導入」から「うたう」までの流れの必要性については先行研究では言及されていない。ピアノ技術の向上はもちろんであるが、歌につながる導入がとても大切である。

歌のイメージを持つための導入方法には大きく分けると2つある。ひとつめは実物や絵本、写真等を用いて視覚で伝えることである。ふたつめは言葉による方法、

すなわち聴覚に働きかける方法である。言葉の獲得の未熟な低年齢児には視覚からが入りやすい。年長児になると聴覚からイメージを膨らますことで楽しみながらうたうことができる。

また、歌をうたう姿勢や発声法について子どもたちに伝えることも歌をうたう一連の流れから考えると導入ととらえることができる。

1. ピアノ教育の必要性

このような導入方法を学ぶためには、考察Ⅱの3で述べたように「音楽(ピアノ)」と「音楽表現」が連動して授業を進めることが重要である。これは単に歌をうたうことだけにとどまらず、子どもの心身の成長を促すためには保育内容の5領域である「健康」「人間関係」「環境」「言葉」「表現」これらが相互に関わらなければならない。

そして、導入を行い子どもが楽しく歌の世界に入るためには、ピアノ伴奏も大きな役割を果たす。実習でもピアノを弾くことが求められることは事実である。2年間という短期間で「音楽表現を引き出す」、「ピアノを演奏することの技量を身につける」、さらには「実習先で、子どもたちの様子を見ながら音楽表現する」ために学生たちのモチベーションを向上させながら実習に向けて自信をつけさせることの大変さを改めて感じている。そして、学生たちのモチベーションを考えたとき、本学では「音楽(ピアノ)」の授業は選択性であるが、「必修科目」にすべきと考える。

2. 教員の役割

教員の役割を「ピアノ教育と音楽系授業の役割と連携の必要性」と「ピアノ教育の授業以外でできる学生サポート」に分けて考える。

1) ピアノ教育と音楽系授業の役割と連携の必要性

入学してくる学生の中には、吹奏楽部や合唱部に所属している学生もおり、まったく音楽に興味がないわけではない。本研究で明らかになったことは、学生がピアノ技術の未熟さから苦手意識を持っているのではなく、ピアノと子どもを前にしたときの緊張感から、子どもの様子がみえなくなってしまっている。それらを解消するためには、授業の中で人前に出てピアノを弾く経験を重ね、場になれることである。そして、教員は、そのような学生のレベルにあった曲や簡単な楽譜を個別に用意する必要があろう。

アンケート結果からわかるように実習を行った学生は、実習時のピアノや手遊び等の実践で達成感や満足感、楽しさを味わえる状況にはまだ至っていない。ピアノ技術の向上を望めない学生は「音楽表現」の授業

で、子どもに歌をうたうことの楽しさを伝えるための方法として、手作り楽器を作り演奏することや、手遊び等を確実に身に付けることも重要である。

2) ピアノ教育の授業以外でできる学生サポート

(1) 2年生へのピアノ教育サポート

学生には授業で多くを学んでほしいが、それだけではピアノ技術を高めることが難しい。そのため、授業以外の時間の活用が必要である。2年生になると、ピアノの授業はないため、個人レッスンを受ける機会がない。そこで、「オフィスアワー」の時間を利用してもらい、学生がピアノを弾く時間を設けている。積極的に参加してもらい楽しく学び、特に実習前には課題曲を練習して、自信を持って実習に挑戦してもらいたいと考える。

(2) 入学前教育での学生サポート

2018年度5月から8月の初めまで愛知みずほ短期大学「オープンキャンパス」の参加者の中で希望者に「音楽あそび」や「ピアノレッスン」等を行った。

また、「キャリア入学前教育」として現代幼児教育学科の入学予定者のうち希望者を対象に「ピアノのレッスン」と「幼児歌曲をうたう」ことを12月中旬～3月中旬まで行った。その目的は入学時にピアノの未経験者をなくし、ピアノを弾くことに対しての不安を取り除くことであった。「参加者には進度に応じて目標を立ててもらおう」、教える側も入学前に一人ひとりを知ることができ、「指導の目標」を立てやすい。参加者に「入学前教育」の感想を聞いてみると、「楽しかった」というキーワードが多かった。また、入学後の授業に対して、「弾けるようになりたい」とピアノに対して前向きな姿勢が感じられた。この前向きな姿勢を入学してからも続くように学生には上記で示した音楽系授業の役割を実践していきたい。2019年度の「音楽（ピアノ）」で、「入学前教育」のレッスンが生かされることを筆者らは期待している。

おわりに

学生が子どもの前でピアノを弾いたりうたったりすることへの緊張感を軽減するためにも、人前で披露する体験を今後も授業に取り入れていくことが望まれる。学生自身が弾くことの楽しさ、うたうことの楽しさを感じ、保育に生かせるようにすることが音楽系授業の目標である。そして、学生の個性を生かした音楽表現を伸ばし、保育のための「自分の特技」と思えるように自信を持って卒業を迎えてほしいと願う。今後は、「音楽表現」が保育内容の「表現」領域のみならず、他の領域と相互にかかわっていることを引き続き分析していきたい。そして、歌をうたうことが幼稚

園教育要領にある「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」⁹⁾につながっていることを明らかにしていきたい。

また、本学での授業だけではピアノのスキルを上げることは難しい。そのためにも「入学前教育」から、学生自身が音楽に親しみ、楽しく弾きたいができることを願いたい。この「入学前教育」のレッスンをうけた学生はピアノレッスンだけでなく、入学にあたり教員との距離がより近づき、短大生活をスムーズに迎えることが出来るのではないだろうか。

引用文献

- 1) 原 友美 「保育内容一表現」－乳幼児期の歌唱教材－保育所での実践観察から見てきた歌唱教材の条件－瀬木学園紀要 2018年 第13号 p30-31
- 2) 丸山亜季 『こどもと音楽を創る』 一ツ橋書房 1978年 p12
- 3)-1 荒木美知子・野村優子・上藤礼子 「短期大学での保育士養成とその指導の検討－保育実習に関するいくつかのアンケート調査結果の分析から」大阪女子短期大学紀要 第35号 2011年 p55-69
- 3)-2 石塚将之 岡泉志のぶ 「幼稚園実習におけるピアノ課題曲(生活の歌) 資料 ～栃木県歌の私立幼稚園を中心～ 佐野短期大学研究紀要 第24号 2013年 p69-79
- 4) 斎藤恵 「幼稚園における歌唱指導に関する一考察－幼少連携も視野に入れて－」大妻女子大学家政系研究紀要 第53号 2017年 p89-97
- 5) 原友美・清原みさ子・豊田和子・井深淳子 『戦後保育の実際』－昭和30年代はじめまでの名古屋市の幼稚園・保育所－ 新読書社 2003年 p85-86
- 6) 小泉裕子他「保育活動における『朝の会』の意義を検討する」日本保育学会第71回大会発表要旨集 2018年 p212
- 7) 梅澤由紀子 「幼児の歌唱教材論ノート(1)－保育者への実態調査をてがかりに－」愛知教育大学幼児教育研究4 1995年 p39-49
- 8) 文部科学省 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館 2018年
- 9) 文部科学省 『幼稚園教育要領解説』 フレーベル館 2018年の第1章総則第2の3
「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」①健康な心と体 ②自立心 ③協同性 ④道徳性・規範意識の芽生え ⑤社会生活との関わり ⑥思考力の芽生え ⑦自然との関わり・生命尊重 ⑧数量や図形、標識や文字などへの

関心・感覚 ⑨言葉による伝え合い ⑩豊かな感性と表現

参考文献

岸川良子他「保育者養成校における音楽授業の内容・方法のあり方」 日本保育学会第71回大会発表要旨集 2018

p1056

曲田映世他「保育者養成校における実習指導方法の開発(3)」 日本保育学会第71回大会発表要旨集 2018年

p793

大森由美子「幼児の音楽表現活動に関する一考察 -保育実習アンケートを通して-」 東海学院大学 p49-55

参考(今回の実習でうたわれた曲)

「まつぼっくり」作詞広田孝夫 作曲小林つや江 1936年
「どんぐりころころ」作詞青木存義 作曲梁田貞 1921年
「山の音楽家」作詞水田詩仙 作曲ドイツ民謡 編曲服部克久 1948年
「焼きいもグーチーパー」作詞阪田寛夫 作曲山本直純 1969年

「大きな栗の木の下で」作詞作曲 イギリス民謡 1939年
「朝のうた」作詞増子とし 作曲本田鉄魔
「おはよう」作詞作曲不明
「おべんとう」作詞香山美子 作曲小森昭宏 1973年
「おかえりのうた」作詞天野蝶 作曲二宮道子
「さようならのうた」作詞高すすむ 作曲渡辺茂
「くじらの時計」作詞関和男 作曲渋谷毅
「希望の歌」作詞シラー 作曲ベートーヴェン
「汽車ポッポ」作詞富原薫 作曲草川信 1938年
「うんどうかい」作詞三越佐千夫 作曲木原靖
「運動会のうた」作詞小林久美 作曲峯陽
「バスごっこ」作詞香山美子 作曲湯山昭
「恩徳讃」作詞親鸞聖人 作曲清水修
「がんばりまんのうた」作詞ともろぎゆきお 作曲峯陽
「にんげんっていいな」作詞山口あかり 作曲小林亜星
「手のひらを太陽に」作詞やなせたかし 作曲いずみたく
「かたつむり」作詞作曲文部省唱歌
「たきび」作詞巽聖歌 作曲渡辺茂
「キャベツの中から」作詞作曲不詳
「まっかな秋」作詞薩摩忠 作曲小林秀雄 1963年
「こぎつね」作詞勝承夫 作曲不明 ドイツ曲